

Title	一九九八年度修士論文要旨；一九九八年度卒業論文題目
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1999
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.68, No.3/4 (1999. 5) ,p.201(425)- 219(443)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19990500-0201">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19990500-0201</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 一九九八年度修士論文要旨

【日本史学専攻】

### 鳥羽院政期の村上源氏

山田 彩起子

院政期、特に鳥羽院政期は、摂関家他、後に清華家・名家などと呼ばれる家の大本となる貴族の家格が編成された時期である。

当時家格を維持した貴族は、特殊な芸や学問のある者を除けば、天皇の外戚となるか、或いは乳母の一族として院の近臣となるかの何れかの方法で王権に直接密着した者にほぼ限られていた。それ故か、鳥羽院政期の貴族の家格の成立や、宫廷の政局について述べた先行研究では、摂関家他、閑院流藤原氏（白河・鳥羽・崇徳・後白河各天皇の外戚。清華家のうち三条・西園寺・徳大寺の三家はこの流から出た）・天皇の乳母の一族として勢威を誇った様々な院の近臣に関する考察が主になされている。

しかし、摂関家に次ぐ上級貴族として閑院流藤原氏と共にあげられる村上源氏（清華家筆頭の久我家等はここから出た）に關する先行研究の多くは、「白河院政期の永久の変によつて村

上源氏の長者俊房の子孫が凋落し、俊房の弟顯房の子孫、特に彼の長男雅実の子孫が同氏の主流になつた」と結論付け、永久の変の頃に村上源氏の家格が決定したかのような見解を示している。

その一方で、永久の変後の村上源氏に関する唯一の先行研究（但し管見の限りで）では、永久の変後に一時は俊房流が復興したことや、顯房流も順風満帆ではなかつたことが指摘されている。

故に筆者は、「村上源氏の家格の成立時期は、他の多くの貴族の家同様に鳥羽院政期だつたのではないか。ならば、村上源氏—鳥羽朝以後は、王権との直接的結び付きはなかつた—の家格形成過程の考察を通して、当時の貴族社会における家格維持方法を新たに発見できるのではないか」と考えた。そこで本論では、白河院政期末期から鳥羽院政期（本論では前半『白河院崩御→崇徳天皇退位』と後半『近衛天皇即位→鳥羽院崩御』に分割して検討）の頃の村上源氏の諸問題の分析を通して、村上源氏が家格を維持した経緯を考察した。まとめると次の通りである。

①永久の変後、顯房流が直系の雅実を中心に村上源氏の主流になつたかに見えた。しかし、「白河→鳥羽→崇徳」という閑院流藤原氏に連なる皇統が確立されると、白河院は顯房流村

上源氏を牽制し始め、顯房流の傍系は没落し、直系は閑院流藤原氏に政治的地位を脅かされるに至った。一方俊房流は、親しい関係にあつた輔仁親王の子源有仁（白河院猶子。妻は閑院流藤原氏の娘）を媒介として、閑院流藤原氏及び彼等に連なる王権へ接近し、やがて摂関家（但し、忠通ではなく頼長）の姻族にもなつた。このように、俊房流の方が顯房流よりも王権に近い立場にあつたためか、鳥羽院政期前半までは官位昇進の点で顯房流より優位に立っていた。その上彼等は村上源氏の家説「土御門流説」を、充実した家記を基盤にして、顯房流よりも確実に継承していた。顯房流の直系雅実の子雅定も、家記・家説の研究に着手し始めたが、彼が朝儀に通じた者として史料に記されるのは、鳥羽院政期後半からである。

②鳥羽院の寵妃で、諸大夫層の出自の藤原得子（後の美福門院）が皇子（近衛天皇）を生み、彼は閑白忠通やその娘聖子を後見として即位した。閑院流藤原氏に連ならないこの王権を後見として即位した。閑院流藤原氏に連ならないこの王権に期待したのか、雅定は得子の側近の筆頭公卿とでも言うべき位置に立ち、その後右大臣まで昇進して、大臣クラスの家格に落ち着くことができた。得子の縁者を主とする院の近臣だけで諸大夫の娘の得子に母后としての権威を保持させることは不可能であつたから、雅定の如き名門貴族が得子の味方につくことは、得子や院の近臣側にとつても好都合であった。

③得子が母后になると、その縁者たる院の近臣達の勢力も増大し、「忠実・頼長父子等摂関家対院の近臣」という、従来の貴族社会の構造を搖るがしかねない対立が明確に現れた。やがてこの対立に「忠実・頼長父子対忠通」という摂関家の内紛が絡まり、保元の乱の一大要因となつた。乱では、得子や彼女を巡る院の近臣層が勝利し、摂関家代表の頼長が敗死したため、彼を通して王権との接点を築こうとした俊房流は、政治生命に痛烈な打撃を蒙つた。

以上のように、貴族社会が再編された鳥羽院政期において、王権との直接的な結び付きを持たない村上源氏は、その時々の宫廷の情勢に翻弄されがちであった。そのような境遇の中で彼らが上級貴族の家格を保持するためには、顯房流直系の如く、新興勢力の院の近臣——母后となつた得子の一族として前代よりも更に飛躍した——にも接近し、そちらのサイドからも王権との接点を築く必要があつたのである。また、当時の貴族が家を保持するためには、政治的地位の確立の他に、確かな家記・家説を持つことも不可欠であつた。故に顯房流直系の雅定も、政界での地位獲得の他に、家記・家説の研究にも努め、やがて「朝儀之家」と称えられるに至つたのである。

## 足利義晴政権の構造

羽田 聰

足利義晴が將軍に在職していた時期（一五二一—一五四六年）のうち、天文年間の室町幕府を構成した要素としては、『大館常興日記』や『親俊日記』や『鹿苑日録』など、当該期における記録類から、幕府奉行人・伊勢氏や越後氏・公家・寺社・内談衆・女房衆・守護大名などを検出することが可能である。これらの構成要素は、それぞれが独立して機能していたのではなく、互いに作用しあつて機能していた。本論文の目的は、こうした要素が幕府の中にどのように位置付けられ、互いがどのように関りあつていたのかという点から、義晴期の中でも特に天文年間における室町幕府の構造や特徴の一端について言及することである。

本論文ではそのための素材として、当該期において特に顕著な活動の形跡が認められるという理由から、將軍の側近とでも呼ぶべき内談衆や女房衆、幕府を外側から支えた守護大名の三者を取り上げて検討を加えた。第一章では、内談衆の成立時期・その成員や幕府内部で果たした役割・義晴が内談衆を編成した意義について、第二章では、義晴期における女房衆の検出

を通して、彼女達の経済基盤や幕府内部で果たした役割について、第三章では、御内書を用いて義晴期における幕府と守護大名との関係について、それぞれ相互の関係や義晴との関係を考えながら考察を行なった。

内談衆は、天文五年八月に足利義晴が編成した側近衆であり、時期的な変遷があるものの、義晴の腹心であつた大館常興を中心とした八人ないしは九人で構成されていた。彼等には、「内談」や「披露」といった会議の開催、「手日記」や「折紙」といった文書の回覧を通して將軍への意見答申を行なうという具体的な役割のほかに、各メンバー独自の役割があつた。中でも、内談衆の各メンバーが幕府の構成要素であった守護大名や公家と関係が深く、その仲介や交渉を担当していたということは、将軍が内談衆を通して彼等との意思調整を計ることが可能となり、義晴が内談衆を編成した意義はここに求めることができる。女房衆は、当該期の記録や文書などから十五名程度が検出された。その経済基盤は、所領からの収入や依頼を取次いだことによる礼錢などであつた。彼女達には、御成への隨身や取次ぎといったどの女房にも共通する役割のほか、特定の女房に固有の役割というものも存在した。こうした役割の中で、將軍と第三者とりわけ内談衆との取次ぎや、御倉の出納管理など、幕政にかかる部分で顕著な活動をしたのは、大館氏の出自と考へ

られる宮内卿局や、摂津氏の出自である左京大夫局など中脇クラスの女房であった。彼女達は、將軍に近侍していたことが知られていて、内談衆と同じ側近衆でも、より將軍に近い存在であつた。恐らく、大館氏や摂津氏など、当該期に幕政に関与していた一族の出自であることが、彼女達がこうした役割を担うようになった背景であると考えた。

守護大名は、在地支配進展のための足掛かりとなる、將軍を通した官途授与や一字拝領といった榮典を受ける代わりに、礼銭などを進上する経済的基盤、あるいは有事の際の軍事的基盤としての役割を果たすという具合に、幕府とは相互補完的な関係にあつた。こうした幕府と守護との関係は、將軍と守護の二者間だけで完結するものではなく、その間を内談衆が仲介していた。内談衆が將軍と守護との仲介にあたつていたことは、將軍が内談衆を通して守護との意思調整を計つていたことに大きく関係していると考えた。

これらの三者は、將軍である足利義晴を基点として考えると、將軍—女房衆—内談衆—守護という関係にある。このうち、女房衆と内談衆は將軍の側近衆として捉えると、天文年間の室町幕府には、將軍—側近衆—守護という三者の深い繋がりが見え、この三者の円滑な関係が創出されていたのが天文年間の室町幕府の構造であり、最大の特徴である。この時期の室町幕府は、

足利義澄や義稙のように、最終的に將軍職を追われたり、義晴が京都からの出奔を余儀なくされた時期に比べると、政局は比較的安定しており、恐らく、こうした將軍・側近衆・守護という三者の関係がうまく噛み合つた結果として創出されたのが、天文年間における室町幕府の安定性であったといえる。

### 近世大名の本家・分家関係

—宇和島藩伊達家を中心にして—

倉持 隆

幕藩制社会において、大名は幕府によつて一族ごとに掌握される面があつた。さらに、大名家の多くは、本家、あるいは分家のどちらかに属していた。したがつて、大名の本家・分家関係を考察することは、大名社会のより一層の解明につながると考えられる。

一般的に分家大名は支藩として本家に従属していたといわれている。分家大名は、領地の与えられ方によつて、「別朱印領外新知分家大名」、「別朱印領内分家大名」、「内分分家大名」に分類されるが、宇和島藩伊達家は本家からの分知ではなく、將軍から直接領地を与えられる「別朱印領外新知分家大名」で

あつた。さらに、宇和島藩は江戸中期以降本家からの自立の動きをみせる。そのため、重臣対策や血縁保持といった意義をもつた支藩の枠にはあてはまらないものであつた。このように、宇和島藩伊達家は本家への従属だけでは捉えられない分家大名であつた。そこで、本稿では、同じく仙台藩伊達家の「内分分家大名」である一関藩田村家と比較しつつ、宇和島藩伊達家がどのように本家から自立していったかを検討した。分析は、宇和島に残されている「宇和島伊達家文書」を中心に行つた。

宇和島藩伊達家は、江戸中期までは、本家である仙台藩伊達家に依存する面が強かつた。それは藩政の後見、財政的な援助の形で表れていた。しかし、寛延二年（一七四九）仙台と対等であると主張して「本家・末家論争」を起こした五代藩主伊達村候（ひらとき）を契機として、次第に仙台への依存を弱めていった。村候は家のために論争をしたと主張しており、家中に本家からの自立した意識をもたせるために、論争を起こした可能性も考えられる。これに対し幕府は、徳川宗家としての立場から、仙台本家を支持した。国持大名格であった宇和島藩ほどの格式を持つ大名でさえも、幕府の本家という立場の前では、権限を制限されることもあったことがわかる。

寛政期に起こつた仙台・宇和島の家格をめぐる「中将・少将座着一件」では、仙台から宇和島への影響力が低下していたこ

とがわかった。それは、大名家格制の変化にみられるような幕藩制の変化とも対応していた。また、多くの分家大名の家格が低かつたのに対し、宇和島藩伊達家は国持大名格であり、そのなかでも国持大名に近い存在であつた。同格の大名とのつながりを強めながら、本家からの自立を達成していったのである。

近世後期には、同家としてのつながりは残つたが、財政や儀礼などの面において、宇和島は本家から自立した状態になつていた。これは、一関藩田村家が、依然として仙台本家への従属が強かつたのとは対照的であつた。また、幕末期には宇和島が新政府側となり、幕府側の仙台に対して、伊達家の代表として、説得にあたつた。明治に入ると、幕末の藩主宗城が勲功により、侯爵に任じられ、仙台の伯爵を越える格式となるに至つた。

以上のように、宇和島藩伊達家は本家・末家論争を起こした五代藩主村候を契機として、仙台本家から自立していったことが明らかとなつた。したがつて、宇和島藩伊達家は本家へ従属する支藩としては捉えられないものである。

### 近世浅草寺境内における芸能興行

島田 倫子

本論文は、近世における金龍山浅草寺の境内で興行された見世物を中心とする諸芸能の興行制度と興行組織を明らかにし、近世江戸の見世物の興行権とその所有の問題について考察を加えることが目的である。

まず、近世後期における浅草寺境内での境内小屋掛け見世と日限の見世物との興行制度を明らかにした。浅草寺境内での諸興行は、境内世話人という浅草寺領内に在住する人物によって統括され、また、境内社会は境内名主・組頭といった領内の町組織の延長上にあつた。つまり、境内は浅草寺の宗教的な支配組織とは別に、浅草寺の年貢地である領内の町組織の支配組織によつて運営されていたといつてもいいであろう。

その次に、將軍・東叡山門跡の浅草寺御成とその時行われた芸能上覽の分析より、まず、近世後期において浅草寺は信仰の場であると同時に様々な芸能が興行される娯楽の場であったこと、そして、そのことは当時の権力者であった將軍や幕閣、東叡山門跡にまで浸透していたことが明らかになる。それらの権力者の上覽にあづかることにより、境内世話人になつて境内での権力を延ばした松井源水のような香具師がいた。また、文政期から盛んに境内で行われた細工見世物の興行は興行師と細工人、口上人、小屋主と分業化されており、見世物の興行といつても江戸と大坂との間の興行師のネットワークの存在と興

行組織の分業化が進んでいたことを明らかにした。

そして、浅草寺境内での芸能興行権を巡つて、寛政年間に香具師と乞胸との間で行われた論争を通して、見世物など寺社境内での芸能興行権の統制と興行権の所有について考察を行つた。そこから、乞胸と香具師という異なる集団によつて芸能興行が行われていた現状と、近世後期の江戸における芸能興行の発達とそれに対する幕府の統制があまり徹底したものでなかつたことが判明する。このように、見世物興行に関して幕府の統率に曖昧な面があつたために、その支配の間隙を縫うようにして自由で活力溢れる芸能が生まれていつたのである。

#### 〔東洋史学専攻〕

オスマン・アラブ主義者のディレンマ

——〈盟約協会〉の設立とその活動——

田口 晶

二十世紀初頭に焦点を合わせたアラブ・ナショナリズム研究の課題はオスマン帝国とアラブの関係を描くことだ、といつてよいだろう。

研究史上の見解は、公定ナショナリズムであるオスマン主義

と対抗的イデオロギーとしてのアラブ・ナショナリズムとの二項対立的な把握による古典的な〈通俗史観〉と、その後の実証的な研究を受けてアラブ・ナショナリズムのオスマン主義との親和性、ひいては運動そのものの限界性を強調した〈修正主義〉的研究に分かれている。だが、肯定的であるにせよ、否定的であるにせよ、民族主義史観や近代化論の枠内に留まっているという点において両者は同根に過ぎない。

本稿は、このような研究動向に規定されてきたオスマン軍人を中心とする秘密結社〈盟約協会〉の再評価を目的としている。その際、彼らの思想的立場を〈オスマン＝アラブ主義〉と捉えるところに議論の出発点を置く。これは、ともすれば否定的にとられがちであったオスマン主義とアラブ主義の両義性を積極的に認めていこうとする枠組みの構築を意味する。

〈盟約協会〉設立の背景やその綱領からは、同じ〈オスマン＝アラブ主義〉者ではありながら、地域主義、特にシリア主義を

特徴とする〈アラブ會議〉のメンバーとは彼らが一線を画していたことが窺える。つまり、トルコ主義が内包された「現存する」オスマン主義の転倒したイデオロギー形式を有し、それゆえ体制側へ取り込まれた後者とは異なつて、〈盟約協会〉の特色は世俗的で諸民族の平等を志向する「真の」オスマン主義の標榜にあつた。彼らの「アラブ」としての立場と「真の」オス

マン主義との間に究極的な矛盾は避けられないが、それから目を背けたがゆえに彼らはむしろラディカルになり得たのである。〈盟約協会〉の構想は、二元的なトルコ＝アラブ帝国から、より多元的な〈東地中海国家〉、さらにイスラーム改革主義者との関わりまでをも含む幅広いものであった。

だが、こうした〈盟約協会〉の構えは、「現存する」オスマン政府の弾圧を招き、〈オスマン＝アラブ主義〉の存在自体を危うくさせることになる。やがてそれは〈アラブの反乱〉から戦後の諸国家体制へ至るアラブ・ナショナリズムの成立をもたらしたのだった。その過程で「分裂」を余儀なくされた〈盟約協会〉は所期の性格を喪失することによつて、皮肉にも〈消え行く媒介者〉（ジェイムソン）としての役割を全うしたのである。

### 春秋時代における君主殺害について

水野 卓

春秋時代に関する研究では、君主そのものに焦点を当て、当時の社会を解明しようとした研究は少ないようと思われる。そこで『孟子』の“春秋時代になり下克上の風潮が盛んになつてきたため、孔子が『春秋』を著した”という

記述に基づき、「左伝」における「君主殺害」に着目した。さらにこれを理由分けしたところ、「君主権に関わる殺害」が大部分を占めていたため、この種類の殺害を特に取り上げ分布図を作成したところ、文公期を境に様相が変わることが分かった。そのため文公期以前を前期、以後を後期とし、さらに被害者・加害者・他国の介入・後継者という4つの視点を設け、前期と後期の殺害の特徴を検討してみた。その結果、前期と後期ではその様相が変化することが分かり、その変化を基に君主の意味・国人の影響力・他国の影響・後期に殺害が減少する理由と言った社会的変化を論じた。

具体的に述べるならば、被害者・加害者については公位継承資格者による公位篡奪を目的とするものが、有力大夫による権力確立を目的とするものに変化することから、君主の存在の象徴化が見られた。また加害者が何らかの処罰を受けていた状況から何も処罰を受けず、むしろより強力な権力を手に入れる状況へと変化してくることから、いわゆる増淵氏のいう「〔国〕の共同体的側面」の存在とその弱体化が見られた。他国の介入については婚姻関係や霸者体制が影響しなくなつてくることから、国際関係の秩序が乱れてくる状況が見いだせた。後継者については、「血の権威づけ」によつていたものが有力大夫によって決定されてくる状況が見いだされ、それと同時に父子相

続が規定され、君主殺害が減少していくことが分かつた。

以上述べたことは全体的に見るとこれらの傾向が強いといふだけで、当然国によつて変化は異なる。しかし、君主殺害が減少してくる理由がどの観点にせよ君主自身の無力化につながつてゐることは言えそうであり、さらにそれは秦漢帝国の皇帝権力には直接つながらないものである。この春秋時代の特徴が戦国時代を経てどのように秦漢につながつて行くのかを研究することが今後の課題となるであろう。

#### 〔西洋史学専攻〕

サヴォナローラのサン・マルコ改革修族

滝川 麻子

ドミニコ会士ジロラモ・サヴォナローラ（一四五二—一四九八）は、一五世紀末のルネサンス期フイレンツェにおいて厳格な宗教的清貧を説いて民心を捉え、一大宗教運動を引き起こした人物として知られる。サヴォナローラには、「夢想的な理想主義者」「狂信的な反動家」といった類のイメージが現代においてもなお根強い。これは、サヴォナローラ死後から現代に至る研究者たちの主觀に拠るところが大きく、そのようなイメー

ジを鵜呑みにすることには問題があると思われる。本修士論文では、研究史における問題点を指摘した上で、サヴォナローラの行動基盤となつたサン・マルコ改革修族の誕生、拡大という初期段階の行動に焦点を当てるにより、従来のイメージに当てはまらないサヴォナローラの現実主義的な側面を明らかにすることを試みた。

サヴォナローラの生前、サヴォナローラを信奉するピアニヨーニ、これに敵対するアラビアーティと呼ばれる人々が存在した。サヴォナローラ死後から現代に至る研究者たちも大別してこの二つの観点のいずれかに立つて研究を行つており、これはサヴォナローラ研究における伝統的傾向になつてゐる。この傾向から、ピアニヨーニ的研究者たちの描くサヴォナローラ像、すなわちメディチ家からフイレンツエを解放した自由の擁護者、そして腐敗した社会、教会の権力者をひるむことなく断罪した悲劇の殉職者といふもの、これに対し、神權政治を敷いてフイレンツエを中世に退行させた狂信家といふアラビアーティ的研究者らのサヴォナローラ像が形成されることとなつたのである。

こうした研究視点の偏向は、サヴォナローラをいづれかのイメージに包み込んでしまうこととなつた。しかし、サヴォナローラが彼の活動の初期段階から取り組んでいたサン・マルコ

改革修族に関連する活動に着目してみると、むしろ状況にフレキシブルに対応する現実的な性格が窺えるのである。改革修族とはドミニコ会内の厳格派閥のことであり、当時、サヴォナローラが修道院長を務めるサン・マルコ修道院は、ミラノのサンタ・マリア・デッレ・グラツィエ修道院を盟主とするロンバルディア改革修族に属していた。サヴォナローラは彼自身の理想追求を求めて、このロンバルディア改革修族からサン・マルコ修道院を独立させて、新たに自らを盟主とするサン・マルコ改革修族を作ることを目指した。これは一修道院の分離・独立という次元の問題に留まつてはいなかつた。というのも、ロンバルディア改革修族には都市としての威信をかけるミラノが背景にあつたし、サン・マルコ改革修族側にも同様に都市フイレンツエの関与があつた。サヴォナローラは、独立を勝ち得るためにメディチ家をはじめとするフイレンツエの権力者らと一丸となつて行動したのである。俗界ばかりでなく、ドミニコ会内部の状況にもサヴォナローラは的確に対応した。当時のドミニコ会総長トリアーニは非改革派の出身で、急速に勢力を拡大しつつあつたロンバルディア改革修族に押され氣味であつた。故に、トリアーニにとつてサン・マルコ修道院がロンバルディア改革修族から独立して新たな派閥を作ることは、ロンバルディア改革修族の勢力を分離させるまたとない機会だつたので

ある。サヴォナローラはトリアーニと強力に結びついてサン・マルコ修道院の独立を勝ち得、ほどなく自らを盟主としたサン・マルコ改革修族を形成し、拡大を続けていくのである。

本修士論文で取り扱った事項はサヴォナローラの活動の一部に過ぎないため、彼の全体的な人物像を浮き彫りにするには至っていない。しかし、サヴォナローラが見せていた現実主義的な一面を指摘することは、サヴォナローラの全体像を覆いがちな偏向への警鐘になると考へる。

### 芸術と歴史・内的一致をめぐるヘルダーの視野

野村康太郎

J・G・ヘルダーの歴史思想の内には、歴史主義や解釈学の先駆者という從来の解釈枠の再考を促す世界観的要素がある。それは、理想的な原初状態からの退行という歴史把握が揺らぎ深化する過程で生じた、歴史を貫流するものとしての「自然」概念である。歴史を語る際の自然のアナロジーの豊富な使用もそこから理解される。ワイマール期の著作『イデーン』や『神。いくつかの会話』においてその自然という構図は、「力」と「器官」という両要素からなる有機体論としてはつきり理論化

されるが、ビュッケブルク期の歴史哲学的素描においては、世界観的なものとして底流にとどまっているだけに、より緊密に普遍史の大きな展開と結びついている。一方で、同じくビュッケブルク期に発表されたオシアン論やシェイクスピア論においては、詩の言葉が各時代・各民族の歴史的生活を「生きた絵」として後世の人的心に直接伝えるものとして注目されている。特にシェイクスピア論においてはビュッケブルク期の歴史哲学との内容の響き合いも著しく、シェイクスピアの作品が、近代的な複雑化した状況を統一的全体にまとめ上げているが故に世界史そのものとまで呼ばれている。同時にシェイクスピアの創造性は創造主のそれに近づけられ、歴史哲学後半部の盲目的道具としての人間と神との関係が、平行的にシェイクスピアの作品世界の登場人物と唯一全体の進行を最後まで見通している作者との関係に移される。しかし人間の歴史拘束性へのこの時期のヘルダーの洞察とはシェイクスピアをそのまま天に留めおくことを許さず、歴史化の作用の内にこの偉大な詩人も時代の流れに取り残され廢たれていく事実へと叙述は転回する。しかしこの詩人論の底流にも存在する世界観的「自然」、植物モデルは、歴史を貫流する「力」の精粹として詩人の言葉に強い歴史伝達可能性を有する地位を残している。

## ヘーゲルとプロイセン

### —『法哲学』における革命と伝統—

守屋 徹

つまり、国民の宗教的再生による国家の再興が彼の改革の核心であった。一方、国王とアルテンシュタインは国家の統一、形成の為の手段として宗教を用いた。これは、合理主義と絶対主義的君主制の勝利を意味するものであつた。

一九世紀のドイツは、フランス革命と並んでプロテスタンティズムの展開によつて規定されていた。そこで本論文の課題は、第一にシュタイン改革およびその後の改革政治を上の文脈に沿つて把握することである。第二に、ヘーゲルの国家論を同様の要素との関連から見た上で、ヘーゲルとプロイセンとの関係を考察することである。

世紀の転換点においてプロテスタンティズムの諸潮流には、当時優勢であった合理主義的神学に加え、正統派と敬虔主義が存在していた。フランス革命に対する一般の人々の無関心、そのままナポレオンによる支配を招く結果は、絶対主義支配によるばかりではなく、合理主義的神学並びに正統派から生ずる信仰の墮落によるものであつた。そしてこのような状況の中からキリスト教意識を呼び起こそうとする敬虔主義に由来する覚醒運動が生まれてくるのであつた。

シュタイン改革は農民解放、「都市条例」を通して時代の自由主義の要求を実現したが、その根底には宗教的意識があつた。

リヒヤルト・ハルマツツにおけるオーストリアドイツ系自由主義の特質——その歴史叙述と国家構想——

阿南 大

一九世紀オーストリアドイツ系自由主義の研究は、長らく「ドイツ特有の道」史觀を反映し、ドイツ系自由派の没落と反自由主義勢力の台頭がオーストリア近代史を語る上での前提であり、ドイツ系自由派自身を扱う研究は少なかった。近年、H. リッターは、世紀転換期の自由主義的歴史家にしてジャーナリストであるリヒヤルト・ハルマツツに注目し、彼らの歴史叙述がドイツ系自由派に対する「没落史觀」を決定付けたこと、彼らをオーストリアドイツ系自由主義の新機軸と見做し、同時代の進歩的自由主義の思潮の中での比較検討を要することを指摘している。またP. M. ジャドソンは、自由主義とドイツ・ナショナリズムの親和性と「ドイツ系市民」による排他性を、ドイツ系自由派の特質と捉えている。本稿は、ハルマツツの歴史叙述と国家構想の中に、ジャドソンが指摘するドイツ系自由派の特質を見出し、その過程でリッターの問題提起に応えることを目的とする。

まずハルマツツの歴史叙述は、旧時代の自由主義の没落と

「新自由主義」の台頭という同時代史觀の上に基礎付けられており、リッターが指摘したような、「没落史觀」を決定付けるものだつたとは思えない。またハルマツツは、反自由主義的な勢力と見されることの多いドイツ民族派を、ドイツ系自由派と同じ「フライジニッヒ」というカテゴリーで取り扱い、ジャドソンが指摘した自由主義とドイツ・ナショナリズムの親和性という「特質」を、彼もまたドイツ系自由派の中に見出している。

またハルマツツの国家構想は連邦制と諸民族自治の承認、農村改革、普通選挙制の導入などの諸案を伴い、他民族、他階層への寛容を示すものだつたが、基本的にはドイツ系市民による帝国統合が指向され、帝国のドイツ的性格の維持が前提とされた。そこにはジャドソンの指摘するドイツ系自由派の特質、ドイツ系市民による排他性が見出せる。また彼の目標は民主的な工業国家の創設にあつたが、経済政策に対する想像力と明確な綱領の欠如等から、リッターが述べたような進歩的自由主義の思潮の中に置く事はできない。

ハルマツツはオーストリアドイツ系自由主義の蘇生を企図し、その歴史叙述と国家構想には、ジャドソンが指摘する特質が多分に見られた。ゆえに彼の歴史叙述が「没落史觀」を決定付けたとは言えず、進歩的自由主義の思潮とも疎隔した存在であつたと結論付けた。

## 〔民族学考古学専攻〕

### 近代庚申塔の基本的研究

——江戸周辺における造塔集団とその社会的・歴史的背景——

石神 裕之

本稿の目的は、これまで石造美術史的観点より論じられる多くの多かった近世庚申塔について、考古学資料として集成し、定量的分析をくわえ、その資料性を顕在化し、とくに近世村落における具体的な事例の検討から石造物による歴史復元のあり方を模索しようとするものである。分析対象は、現在の東京都区部に設定し、この地域に残存する庚申塔の資料をとりあげた。

分析の手順は、これらの資料を近世の地域的枠組みで捉え直す意味で、五街道を軸とした領域の設定を行い資料の統合を図った。そして、第一に庚申塔の形態に対する型式学的分類から、江戸周辺の型式変遷の過程とその傾向を顕在化し、第二に庚申塔の碑文に対する分析より、造塔者の集団規模とその集団名称のあり方を検討した。

その結果、江戸とその周辺地域、特に日本橋を基点とした半径五里圏内の庚申塔型式の変遷過程は、基本的に斉一的傾向を示し、地域的な偏りのないことが明らかになった。さらに、造

塔者に關わる碑文の分析から、庚申塔を造塔した集団は十人前後の小規模なものであったことを明らかにした。これらの造塔集団は、近世文書との検討から村落内の支配的組織とは異なる集団で、耕作地などの地域的関係が集団の結集要素として考えられること、加えて、一六七〇年代（寛文・延宝期）の前後に、造塔数の増加が見られることから、この時期にこうした小集団が近世村落内に相次いで組織化された可能性を指摘した。また、集団を表す名称が一七世紀には「結衆」など中世的名称を含む、多様性を有しているのに対し、一八世紀以降は「講中」の名称が大半を占めるようになることも明らかにした。以上の考察から、庚申塔の資料的有効性を明らかにすると共に、今後の近世史における位置づけとその果たす役割を指摘した。

### 古代南アラビアの宗教の一側面

——ステラと彫像を中心として——

徳永 里砂

古代南アラビアの神殿や墓からは多数のステラや彫像が出土した。それらの具体的な用途は定かではないものの、前八〇後五世紀頃の南アラビアの宗教儀式においてステラや彫像は重要

な役割を果たしていたと考えられる。

本稿では古代南アラビアの宗教の性質を明らかにする目的で、ステラや彫像を型式分類し、その中で北及び中央アラビアにおいて類例が見られる「目のステラ」に焦点を絞り考察を行つた。

目のステラとは、無装飾の石板に目が表されているが、顔の輪廓が彫り込まれていないステラである。目のステラの型式分類から、主な二つの型式の存在が明らかになった。そのうちの一方は南アラビア北部のジャウフ地方の中でも紀元前八世紀以前のマザブ語文化圏に集中していることがわかつた。

また、もう一方の型式に関して見てみると、出土地はカタバーン王国領内に集中している。さらに、北・中央アラビアで見られる類例に関して地域別に考察を行い、目のステラと比較した。以上を踏まえ、南アラビアの目のステラを考察すると、ジャウフ地方の目のステラは紀元前八世紀頃のマザブ語文化圏で使われ、その後遊牧アラブに伝播したと考えられる。一方、カタバーン領内で用いられていた目のステラは、紀元前千年紀中頃にタイマから南アラビアにもたらされ、紀元後の数世紀間になつてもなお用いられていたようである。しかし、タイマでのこれらのステラの呼称は、このときには南アラビアに伝わらなかつた。南アラビアにおいて目のステラは非常に長い期間使われており、従来考えられてきたような、より具象的な彫像へ發

展してゆく一段階とは位置付け難い。南アラビアは美術的には外来の影響をふんだんに受け入れていたが、ステラに関する宗教思想の側面では保守的であつたといえる。

一九九八年度卒業論文題目

「日本史学専攻」

大学寮の起源とその組織

平安中期における郎等・従者について  
—軍事貴族の動向との関連を踏まえて—

古代の女帝

古代銭貨の使用法に関する一考察

「日本靈異記」における「堂」について

『伊勢宗瑞十七箇条』についての一考察  
「伝授」による文化の普及について

仁海の活動基盤—その二つの側面から

太平洋戦争下に於ける宗教弾圧

綱吉政権と柳沢吉保—側用人の光と影

近世食生活についての一考察

—獣肉食を中心にして—

中世後期瀬戸内海西部の警固衆の消長

—広島湾頭白井氏を中心として—

鳶屋重三郎から見る江戸の出版界

近世村落の秩序と連帶

近世の捨子事情

近世新潟港と廻船問屋

江戸中期の本草学者と薬種政策

久保 輝明

久保 輝明

鈴木康一郎

田浦 蓉子

永野江吏奈

藤本 誠

岡田 篤哉

西 弥生

湯原 紀子

内山登美子

黒川 慎哉

黒川 奈緒

甲田 正治

片桐 圭一

清水 亜紀

砂川 三紀

林 靖明

山崎 均

薩摩藩海外留学生長澤鼎

日本人氣質の不变

—戰時下民衆心理にみられる集団依存性—

森鷗外の「沈黙の塔」「食堂」にみられる社会状況と発禁処分

十五年戦争における女性の戦争参加への自主性とその責任

廣田三原則、天羽声明にみる廣田外交

—対華政策について—

台湾總督府の茶業政策

—台湾茶共同販売所の設置に至るまで—

赤池 洋高

広告と社会—福助足袋—

三石 裕輔

下久保 功

〔東洋史学専攻〕

『夢溪筆談』にみえる沈括の陰陽五行説の位置づけ

隋都大興城の都市計画とその思想

唐代在留外国人の位置

戦国楚墓における密閉性と開通性について

『墨家』の「墨」字が有する意味について

明治政府による徵兵令と民衆の反応

福澤諭吉の「脱亞論」をとりまく環境

「積極外交」、「協調外交」の本質と対「支」政策

日本ファシズムと右翼の思想と運動

工藤 健雄

染富 仁

猪股 亜姫

岡部 泰子

木村 圭一

吉田慎治郎

井門 由佳

後藤 素直

菊地 紀永

初期道教にみえる人間の欲望について  
副葬玉器の意味を中心としてみた良渚文化の社会的特性

佐藤 雅信

黄巾の乱における主力軍早期壊滅の理由について  
東アジアにおける耶馬台国の国際的地位について  
古代中国における刑罰の宗教的意義について

高階審太郎

高本 康博  
高山 倫知  
藤井 敦子

ボスト冷戦期における中台関係  
—冷戦の終結による変化と影響  
朝鮮民主主義人民共和国

小玉 智仁

古代中国における物理的境界と人的境界  
陳勝・吳広の乱再考

深谷 健司

益満 義裕  
山口 真衣

—金正日体制の政治経済展望  
地中海経済とイスラーム

渡邊 秀樹

山下 晃二  
岡田 健吾  
梅村 琢磨

中国古代における家族の構成と形態について  
十三篇『孫子』と『孫臏兵法』の差異に関する一考察

横尾健太郎

張戸 恒平  
西田健太郎  
日下 妙子

オスマン帝国のハarem  
オスマントール・ヘルツルのユダヤ人国家論  
在仏アルジェリア系移民の暮らしと意識

岡村 悟郎

岡田 健吾  
金谷 崇  
上条 奈泉

十四・十五世紀東アジアにおける海の民  
十六世紀倭寇および嘉靖倭乱に対する一考察

横尾健太郎

張戸 恒平  
西田健太郎  
日下 妙子

テオドール・ヘルツルのユダヤ人国家論  
在仏アルジェリア系移民の暮らしと意識  
オスマン帝国の奴隸制度

岡村 悟郎

岡田 健吾  
金谷 崇  
上条 奈泉

移民社会における客家と太平天国  
清末革命期における日本留学生の役割

横尾健太郎

張戸 恒平  
西田健太郎  
日下 妙子

一八三〇～四〇年代における新疆の民族反乱  
一八三八年の英土通商条約の意義

岡村 悟郎

岡田 健吾  
金谷 崇  
上条 奈泉

辛亥革命時の在日華僑吳錦堂について

横尾健太郎

張戸 恒平  
西田健太郎  
日下 妙子

匪賊と共に産主義革命—井岡山時代を中心にして

岡村 悟郎

岡田 健吾  
金谷 崇  
上条 奈泉

ノモンハン事件とソ連の極東戦略および国際戦略

横尾健太郎

張戸 恒平  
西田健太郎  
日下 妙子

一九三〇年代、中、後期を中心として

岡村 悟郎

岡田 健吾  
金谷 崇  
上条 奈泉

毛沢東思想の矛盾について

横尾健太郎

張戸 恒平  
西田健太郎  
日下 妙子

二〇世紀中葉のマレーシアにおける華僑政策と華人化

岡村 悟郎

岡田 健吾  
金谷 崇  
上条 奈泉

廬山會議—なぜ彭徳懷は失脚しなければならなかつたのか  
二〇世紀中葉のマレーシアにおける華僑政策と華人化

横尾健太郎

岡村 悟郎

岡田 健吾  
金谷 崇  
上条 奈泉

大島常木子  
〔西洋史学専攻〕

横尾健太郎

岡村 悟郎

岡田 健吾  
金谷 崇  
上条 奈泉

廬山會議—なぜ彭徳懷は失脚しなければならなかつたのか  
二〇世紀中葉のマレーシアにおける華僑政策と華人化

横尾健太郎

岡村 悟郎

岡田 健吾  
金谷 崇  
上条 奈泉

一八・一九世紀ロシア—貴族社会と官僚国家  
中世スペインにおけるユダヤ人追放令

横尾健太郎

岡村 悟郎

岡田 健吾  
金谷 崇  
上条 奈泉

安達 紘子  
碇 忠志

横尾健太郎

岡村 悟郎

岡田 健吾  
金谷 崇  
上条 奈泉

アルキアス弁護論と古代ローマ帝国 ルネサンス期の哲学とジョルダーノ・ブルーノの思想	岩井 韶子	エギカ王の反エダヤ政策—奴隸化宣言の動機を探る佐々木佳代 H・ミュラー大連合内閣について	佐藤 信仁
一九世紀イギリスにおける化学の制度化 カントの目的論的世界観と歴史哲学	宇藤 嘉啓 遠藤 正暁	オーストリア＝ハンガリー二重帝国におけるチエコ人の オーストリア＝ハンガリー帝国の対セルビア開戦決定の理由	沢井 優佳
一四世紀ペスト大流行期における鞭打苦行の実体 一八世紀フランスにおける捨子とその社会背景	岡村 芙美 尾崎 拓己	ボルドーのワイン用ぶどう栽培と格付けについての考察	民族運動
時計の出現による時間意識の変化 フランス革命における革命歌の歴史的意義	川上真由子 風間 綾	大畑 悟 大塚 良貴	白石 知巳
一七八・一九世紀のパリを中心いて 改革と内乱期（一二五八年—一二六七年）の騎士層について	川端 直子 菊池 数馬	第四回十字軍・聖職者課税におけるインノケンティウス 三世の積極性	篠田 諭
アメリカ占領区におけるドイツ非ナチス化の経緯 ピルグリム・ファーザーズとアメリカ建国神話	北爪 寧 金 淳聖	ルイ一四世治世前半の宫廷女性のあり方と服装の流行	柴田 麻希
ナチスの政権獲得におけるドイツ中間層の役割 一六世紀のカステイーリア・ヌエバ地方における農村社会	北濱 佳奈	多民族国家ユーゴスラヴィアの崩壊 一九・二〇世紀シオニズムにおいてテオドール・ヘルシンが ユダヤ社会に与えた影響	高桑 知子 田中 健雄
ソボールにおける「フランス革命」について ワイメール共和国の教育	東 佑紀 福井 英次郎	独ソ不可侵条約におけるイギリス外交の対応 アウグストゥスの皇帝権力に関する一考察	成迫 達哉 西中村洋巳
ソポクレスにおける神と人間 意義と問題点	齊藤 篤実 河野 広輝	労働者階級私営学校が民衆の読み書き能力向上に果たした 役割についての一考察	能澤 智裕
一九八〇年代アメリカ Reagan 政権期における税制改革の 意義と問題点	三崎 真穂子 靖	建築職人の中世都市における社会的地位について 中世イタリア・フィレンツェにおける内政混乱と経済の 繁栄について	原 智

## ヴィクトリア朝時代

—労働者階級の政治意識について

スペイン異端審問の特質についての一考察

—一六世紀を中心とした個々の事例を中心

イギリス封建制の解体

シュトレーゼマンの「国民共同体」と国内政治

ヨーロッパ中世人の死生観について

アメリカ外交における孤立主義からの脱却の過程

—第一次大戦への参戦を中心

水野 明子

言語変化から見た小笠原島民のアイデンティティ  
中国童舟競渡起源考権沢 泰史  
川野 幸子

宮腰江里奈

ワヤンに見られるインドネシア人の宇宙觀  
客家環形土楼と風水思想

森崎 和敏

メソポタミア・インダス両文明間の海上交易について  
木田橋しのぶ

山田 有人

栗山 真寛  
久慈 大介

横山 薫

佐々木 元

山田 真

佐々木 豊

木谷 健

崎川 隆

二里頭文化の成立過程について

青銅器研究における鉛同位体比法の受容  
江戸所産の地下室に関する一考察

甲骨文における「書体」の分類

「絵高麗」と呼ばれる陶磁器に関する一考察  
タイにおける二つのムスリム

秋元 周子

佐藤 文彦  
陽介

阿部 功嗣

佐藤 弘樹  
杉江 弘樹

安部 俊子

鈴木 康夫  
関口 文肅

石川 貴子

善家 浩二  
高久田 修

伊東 岳史

立花 慶和  
田中 麻衣

伊藤 俊彦

高久田 修  
常世田 昌

岡本 太輔

戸田 裕子  
中澤 宏樹

大谷繪梨子

大谷 真衣子  
田中 麻衣

タイの屋根飾りにみるナーガ信仰についての考察

立花 慶和  
田中 麻衣

古代エジプトのパンについて

エジプトのオベリスク  
東南アジアにおける二元的特質

古墳時代中期の玉作集団について

ケルト美術からうかがえるケルト人像  
エトルリア都市における格子型プランの独自性について

タイ社会の二重構造をめぐる諸問題

コインのデザインから見るアウグストウスの宗教政策  
ヒンドゥー教の寺院

ネワール仏教における宗教的複合に関する考察  
ミトラス教における獅子頭神像についての考察  
神戸居留地における外国人の動態

龍について

イースター島の環境変化について  
曲水—飛鳥板蓋宮伝承地をめぐる考察  
石器研究における再生加工研究の評価について  
武藏の水銀と丹党

ニホンオオカミと人間の関係に関する考察

縄文時代遺跡出土シカ・イノシシ四肢骨の部位別出現頻度の

研究

ボリスの成立と暗黒時代の考古学

中山 鈴生 彩  
平野 古屋 藤原 修平  
前田 水上 古屋 幸平  
吉野 山本 水村 有理  
渡邊 宏樹 斎子 桂 愛  
数馬 直子 友景